

補強後最低 I s 値0.43もⅢ棟の3階部であって、これを建物全体の評価に帰するのは早計といえる。

現診断補強後の数値をみれば、Ⅲ棟は今少しの見直しでも、判定値はクリアできることを既に明確に示している。

コの字型建物にとっては、まず問題の南翼Ⅲを切り離す、さらに北翼Ⅰも切り離す、さらに中央Ⅱの南北教室を切り離す、といった段階的検証をすれば、Ⅱの正面中央部の耐震強化保存活用は、容易に対応可能と判るはず。

これだけ長大な建物には、いわゆる「減築」といえる分棟化による保存活用がありえる。

この建物全体でしか検討評価しないのは、全面建て替えの前提でしか考慮していない証左といえる。免震化・制振化検討も困難性を助長する、ためにする検討だろう。

検討補強案にしても、見栄えよくない鉄骨ブレース補強策以外に、斜材が生じない鉄骨内蔵強化コンクリート添え架構工法もある。
(※添付資料参照 / 関連資料ダウンロードページ / セスレット工法)
このほか内部側では、現状間仕切り壁でのRC造耐震壁化、

便所や階段室のコア部分でのR C造壁耐震強化、
採光や機能に支障のない窓や出入開口部分でのR C造耐震壁強化、
講堂天井内鉄骨の水平剛性強化、
など耐震強化 部材が目立たず内部仕上げができ、
現意匠や各室機能 に配慮した適 材適所の補強組み合わせ策がある。
設計上の要-サル要件によっては、さまざまな提案が期待できよう。